

若杉遺跡 机張原女菰近世墓地

九州横断自動車道建設に伴う発掘調査
概報（湯布院—大分間）



1987

大分県教育委員会
日本道路公団



若杉遺跡調査区遠景



女孩近世墓全景

例 言

1. 本書は九州横断自動車道（湯布院一大分間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は日本道路公団福岡建設局の委託事業として、大分県教育委員会が実施した。
3. 調査の組織は以下の通りである。

総 括 塔鼻勝人（県文化課長）

調査主任 後藤宗俊（県文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長）

調査員 渋谷忠章（県文化課主査）、高橋 徹（同主任）、西 哲弘（同主任）、江田 豊（同主事）、田中裕介（同主事）、永松みゆき（同嘱託）、綿貫俊一（同嘱託）、橋本拓也（同嘱託）

また調査期間中に、平嶋文博（国東町教委）、行時志郎（別府大学聴講生）、池部千太郎（立正大学学生）の協力を得た。女蕨近世墓では地元女蕨集落の方々には調査中、様々な便宜をはかっていただきまして感謝します。

4. 本書の執筆は、渋谷・高橋・江田・田中・橋本があたり、江田・田中が編集した。

目 次

I はじめに	（渋谷）… 1
II 若杉遺跡	（高橋・江田・橋本）… 2
III 机張原女蕨近世墓地	（田中）… 9
IV ま と め	（渋谷）… 24

I はじめに

九州横断自動車道（湯布院一大分間）建設に伴う発掘調査は、これまで主として別府地区での調査が重点的に行われ、すでに十文字原遺跡群、松木台遺跡、ふいが城遺跡などの調査が終了している。

今年度は、大分地区の机張原遺跡と湯布院地区の若杉遺跡が調査対象となり、5月から机張原遺跡調査を開始した。

机張原遺跡は、高崎山の背後に広がる丘陵上に位置し、女璫近世墓地和前年度の試掘調査によって旧石器時代遺物包含層の存在が確認されていた。

調査は、女璫近世墓地から開始し、約130基の墓石を含む石塔類の実測と、約150基に及ぶ墓壇の発掘を行ない、石塔の実測を一部残して8月に終了した。

一方、湯布院地区の若杉遺跡は、机張原遺跡の終了後に調査を予定していたが、工事の進展に伴ない早急に調査を実施するよう要請され、7月より試掘調査を行った。遺跡は、湯布院盆地を見下す標高約620mの小丘陵頂部に位置し、こうした立地からは、さほど重要性の高い遺跡とは推定されなかった。

ところが試掘調査の結果、岩や礫群の間から弥生時代終末期の土器が散乱した状態で検出され、何らかの祭祀に関する遺跡であることが予測されたので引き続いて10月まで本調査を実施した。

こうした状況から、机張原遺跡の旧石器時代遺物包含層については、今年度の発掘調査が困難となり、日本道路公団大分工事事務所と協議の末、63年度以降に調査を実施することになっている。



第1図 路線と遺跡の位置

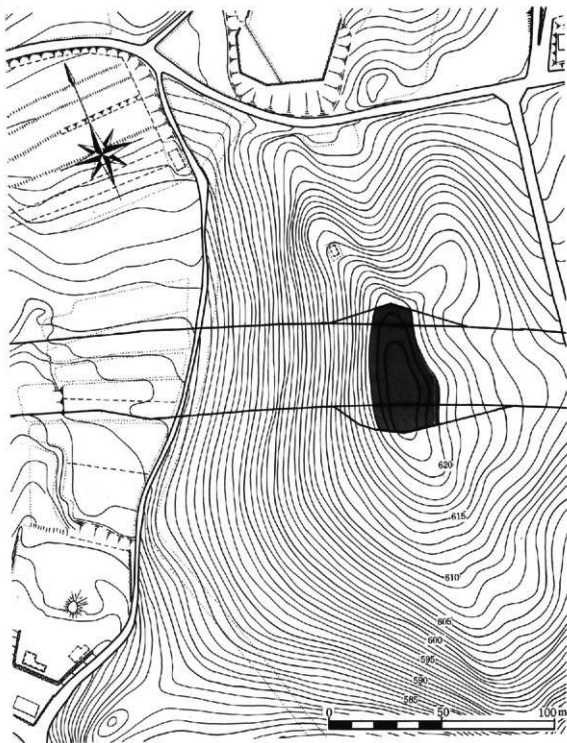
Ⅱ 若 杉 遺 跡

調査の概要

当遺跡は、湯布院町大字若杉の標高約 620m の小規模な独立丘陵の頂部に位置する。この丘陵からは、西に由布岳を眼下には湯布院盆地を望む事ができる。九州横断自動車道はこの丘陵のほぼ中央を横断する。そのため、昭和61年8月上旬に試掘調査を実施して、引き続き9月から約1ヶ月半の間本調査を行った。調査の結果、数個体分の土器片が出土しそれと共に、かなりの密度で火山岩が集中する部分が広がっていることが確認された。これらの火山岩は、おそらく由布岳の火山活動で生み出されたものと考えられる。当遺跡の所在する丘陵を含め、この周辺の丘陵の頂部には、いたるところにこういった岩が露頭している。そういった景観から、このあたりは「イワムレ」と呼ばれている。岩の大きさは縦・横とも1.5mを超えるものから拳大のものまでみられた。岩の集中する部分は調査区の北側及び南側に顕著にみられるが特に北側に大型の岩が集中する。これとは逆に調査区中央部を中心に岩の分布が希薄な部分はいくつかある事が確認された。遺物は、主にこういう希薄な部分に多く出土する。いずれも、弥生時代終末期土器片で、ほとんど細片で若干の接合は可能なものの完形になり得るものはない。器種は、甕が大部分を占め、鉢、小型の脚付土器がわずかに混じる程度である。遺構については、土坑らしきものが4基検出されたものの出土遺物との関連性はつかめなかった。(江田)



第2図 湯布院町所在遺跡分布図



第3図 若杉遺跡周辺地形図

調査区全景



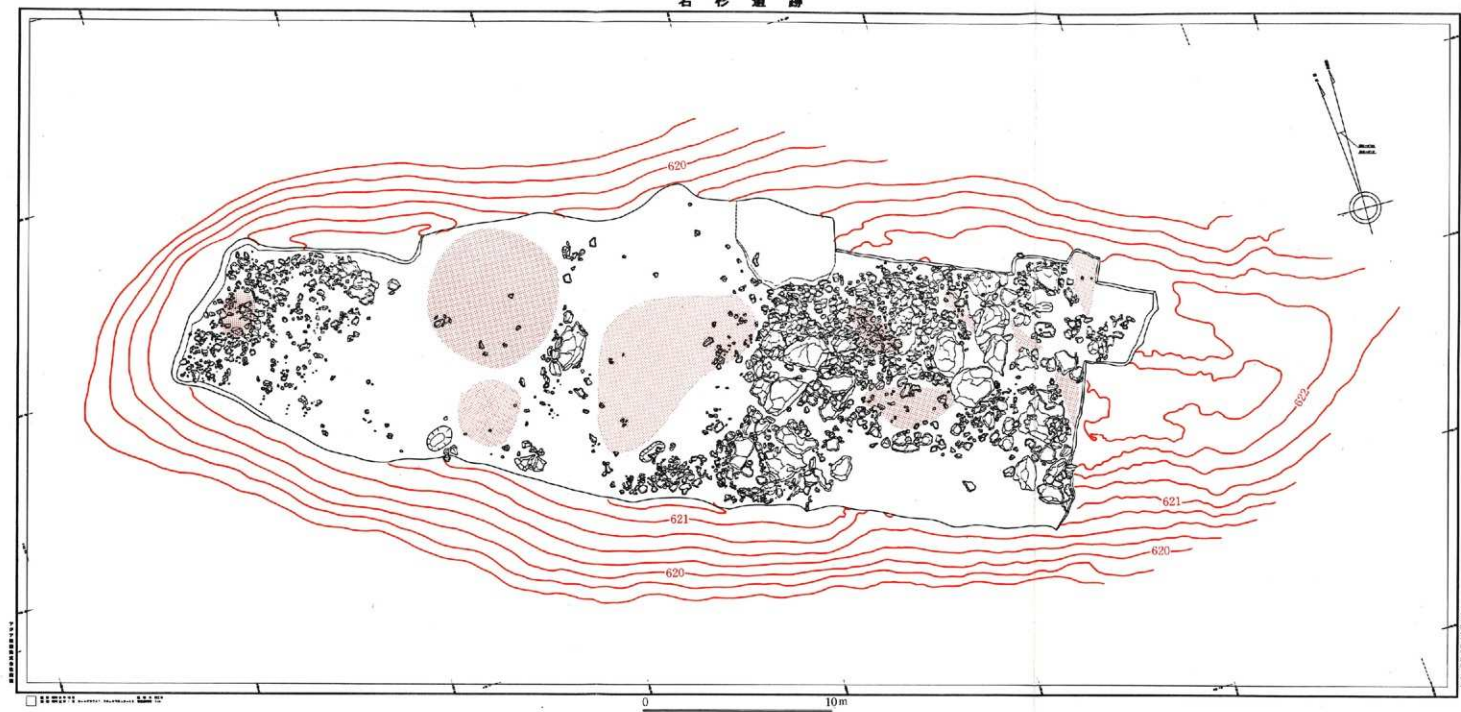
礫集中部近景



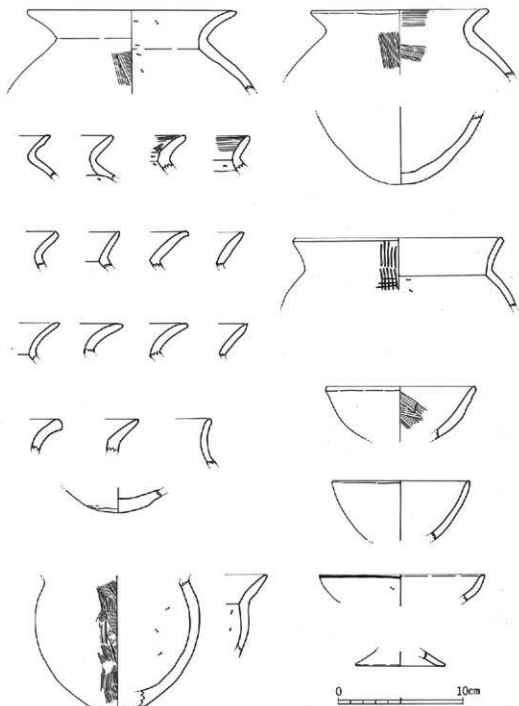
遺物出土状況



若杉遺跡



第4図 若杉遺跡調査区平面図



第5図 若杉遺跡出土土器実測図

小 結

前述したように、遺物は細長い丘陵頂部の東西約50m、南北10～18mの範囲に分布する。丘陵は厚さ20～30cmの黒色火山灰土に覆われており、薄い漸移層を経て明黄褐色の地山に到る。若杉遺跡出土の遺物はすべて土器で、しかも非常に小さな細片である。黒色火山灰土層の下部から漸移層にかけて包蔵されている。出土は一概では無く、細くみれば10箇所集中分布を示す。露出した岩・礫が集中する調査区東側でも出土するが、その場合比較的岩・礫がまばらな箇所に集中する傾向がある。また調査区中央部の岩・礫が希薄な地点では、遺物は丘陵頂部から北側斜面に流れ込んだ状況があり、本来丘陵頂部の平坦面に置かれていたものであろう。

出土の土器は短く外反する口縁部を持つ甕が主体を占め、他にはほぼ口縁部が直線的に開く小型碗および小型の低脚付の器種が極く少量存在する。明確に壺と断定し得る破片は無い。甕は胴長で外面に細いハケメ、内面にヘラ削りを施している。外面に細い印目のついたものもみられる。

湯布院盆地内に於ける土器編年はこれまで調査例が無く、確立したものがない。しかしながら大分県地方の大土器分化図レベルでみれば当地方は別府湾岸を中心とした「東部文化圏」に属すると考えられ、これに準拠する。これによれば出土土器は大分市多武尾遺跡SD-6溝土土器群に対応させることが妥当である。従って弥生時代終末を中心とする時期に比定されることになる(註1)(註2)。

検出された4基の土壌は、埋上からみて近年掘られた可能性が強く、明確な遺構は確認されていないわけである。出土の土器は炊飯具としての甕と、盛り具としての小型碗からなり、祭祀用の器種を欠くことから埋葬および祭祀関係の遺跡である可能性は少ないと思われる。非常に小規模なグループが、同一型式内でもさらに短期間、当地に留まった折使用した土器と考えれば、眼下東南方向に湯布院盆地を望む当遺跡の立地からみて、本遺跡が交通・通信のハブ簡易「ベースキャンプ」として機能したと見做すことも可能であろう。偵察・監視的な機能が推定されている別府市ふいが城遺跡においても、古墳時代～平安時代に遡る土器片の出土が報告されており、若杉遺跡と立地条件において強い類似性がある。

弥生時代終末期を中心とする時期、かかる機能を持つ遺跡が存在したとなると、その歴史的背景に鑑みて本遺跡の持つ意味は極めて重く深いものとなる。(高橋)

(註1) 高橋敬『豊の青銅器』『えとのす』29

(註2) 松田敬基他『多武尾遺跡』大分市教育委員会 1982年

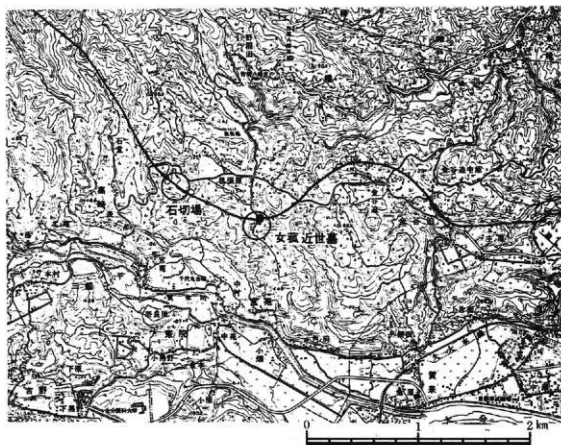
(註3) 田中等介他『ふいが城遺跡・机張原遺跡』日本道路公団・大分県教育委員会 1986年

Ⅲ 机張原女菰近世墓地

1) 女菰近世墓地の立地と歴史的環境

机張原女菰（メハル）近世墓地は、大分市大字机張原字女菰に所在している。付近一帯の地形は、中世城跡のある高崎山（標高 628m）の南面に広がる丘陵地帯で、西方から東方にかけて、金谷迫面、庄ノ原面、上ヶ丘面と呼ばれる三つの地形面が複雑に展開している。女菰墓地のある金谷迫面は、おおむね120～160mの標高を維持し、かなりの起伏を有している。

中世の机張原一帯には、由原八幡宮の僧房が点在していたといわれ、南北朝時代には高峯城合戦の舞台となったため、合戦に由来する伝承が多く残留している。この付近が畑地として開墾され、幾つかの村々が展開してくるのは、中世後期から江戸初期にかけてのことである。江戸期の机張原一帯は府内藩領となり、一部は新村に一部は高崎村に編入されていた。女菰は高崎村に所属していた模様である。現在、机張原一帯は四集落から構成されている。新村と女菰は江戸初期に成立したが、他の二集落は府内藩の天保改革に際し、広瀬久兵衛によって成立した開拓村である。



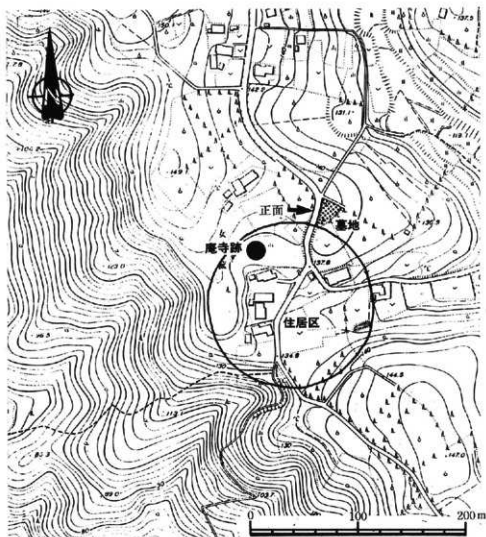
第8図 遺跡の位置

入植者の多くは佐伯・南海部南部からの移住であり、今日でも往時のことを顕彰して久兵衛講が営まれている。

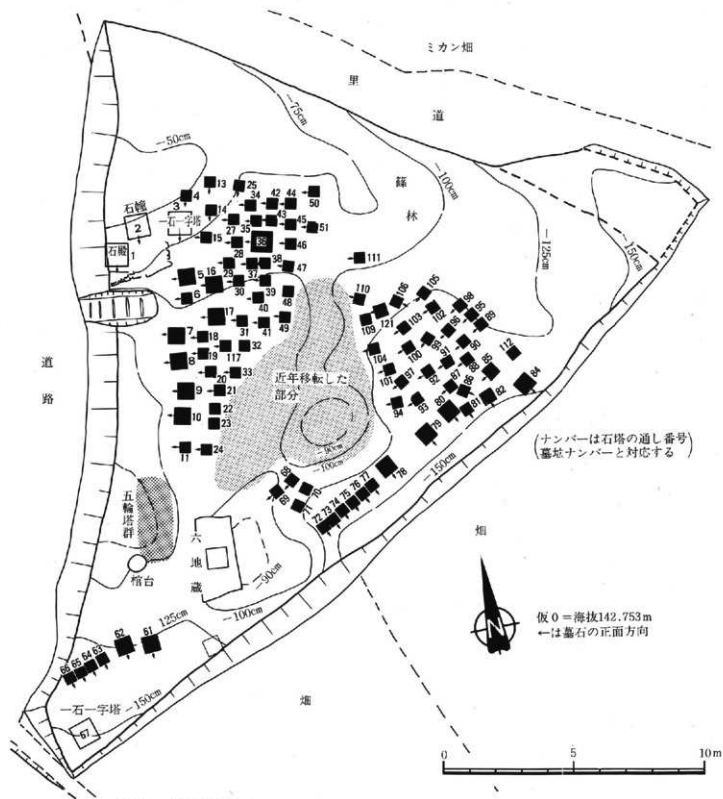
さて、女蕨は現在六戸の家によって構成されているが、うち二戸は江戸末期と近年にそれぞれ村入りしたものである。他の四戸は全て葛城姓で本来は同族集団であった。この他に、かつて禪宗系の庵寺があり、高見姓を名のっていたが、現在は村内に居住していない。女蕨墓地は高見家、松田家、葛城家（三戸）の五家族が所有している。本家筋にあたる葛城成美家の口承によると、葛城家は戦国末期から江戸初期にかけて、机張原の南に位置する東院地区から移住してきたといわれている。

註1 千田昇「大分川下流域の地形」『大分川流域』1986年 大分大学教育学部

註2 『大分県史』近世篇Ⅱ 1986年 大分県



第7図 女蕨集落と墓地



第8図 女貴近世墓地墓石配置図

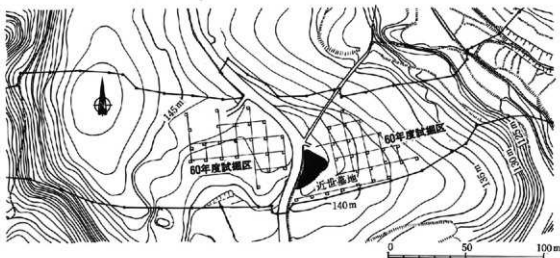
2) 調査経過と概要

昭和60年度の試掘調査に際して、この付近一帯は旧石器遺跡の候補地として調査されたが、その時点で女薮近世墓地の存在が注目された。現在この墓地は、五家族によって共同管理されているが、これらの家々の累代墓は、別途、扶間町高嶺に設けられているため、女薮墓地は、累代墓様式が成立する以前の近世墓地景観を非常に良く保持していた。墓石の中には、この地域に特有な大型石組みによる石造造が多く見うけられ、近世における墓石形式を知る上で貴重なものであった。また墓地内には、かつての道路改良工事に際して移転した五輪塔が十数基おかれており、中世末期から近世末期における、共同墓地の全貌が追求できる好例であると判断された。

調査はまず昭和60年度に、墓地全体の1/100の地形図を作成した。次に石造物や墓石の位置を記入し、それに適し番号を付した。さらに番号順にカードを作成し墓石の規格、大きさ、形式、碑銘の判読、正面方位などの記録を行った。

墓地の移転は昭和61年4月に実施された。その際、各家の墓石等は字高嶺にある累代墓に分散移転した。その後、遺骨の掘り上げ作業が小型コンボと人力によって行なわれたが、各墓石の下部から人骨とともに、土師質土器、近世陶器、磁器などが確認され、一部の墓墳から甕が発見された。また掘り上げは墓墳底部まで及ばないため、かなりの墓構や遺物が残存しているものと予想されたので、古い墓石群の存在する墓墳の掘り上げを中止し、再び調査を行うことにした。

この調査は墓地移転の際の擾乱土を排除して墓墳を検出し、さらに掘り下げを行った。棺底には多くの副葬遺物が良好な状態で保存されており、なかには棺材が遺存している例もあった。また一部の墓石下には墓墳がないものもあり、この墓地は江戸中期に他の墓地から移葬されたものであることが判明した。この調査は5月から8月にかけて実施された。



第9図 女薮近世墓地周辺地形図

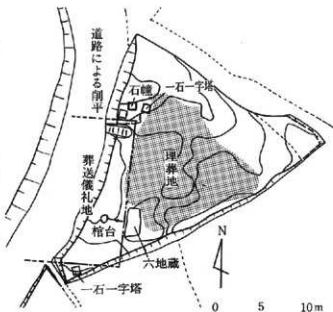
3) 墓域の構成

まず墓域の現状観察を行い墓地景観の復元を図り、その後、発掘調査によって検証を試みた。(第10図)

墓域は大別して葬送儀礼地と埋葬地に分割できる。葬送儀礼地の西側部分は、幅員5mの道路が走っているため改変が著しいが、旧状は幅員1mの里道であった。したがって、旧状は南北20m、東西15mほどの広場となっており、ここで盆供養や盆踊りが催されていたといわれている。この広場と東側の埋葬地の間に、西方を向いて六地藏が建立されている。

この正面には、かつて葬儀の際に棺を安置した石製の棺台が埋設され、北東隅には方形に列石を並べ一段高く区画された部分に石幢が一基建立されている。またこれに隣接したところと、広場の南端に一石一宇塔が各一基ずつ建立されている。さらに棺台の北側には、現状の道路に沿って五輪塔が十数基立て並べ

られていたが、これは、かつて墓地南側の籾の中にあつたものを道路改良の際に移転してきたものである。発掘調査の結果、葬送儀礼地内では埋葬が行われておらず、女墓墓地の成立時点から西側半分の部分は葬送儀礼地、東側半分は埋葬地として整備され、今日に及んでいることが判明した。また棺台は一石一宇塔の間には、六基の墓石が立っていたが、いずれも調査の結果、墓墳はなく墓地成立の前後に他から移転されたものと考えられる。



第10図 墓地空間の模式図

4) 葬送儀礼地

葬送儀礼地を構成する基本的要素は、広場の空間である。ここでは埋葬儀式や供養などが行われ、死者の遺族や村の人々が参列する場であったし、死者の葬送を通して人々が交流する場でもあった。この広場は現在、道路改良工事で大半が失われた。葬送儀礼地が持っていた本来の意義は、すでに忘れられつつあるが、現位置に石造物が保存されている。

棺台と六地藏(表紙写真)

六道において衆生の苦過を救うといわれる六地藏は、3.5×1.5m、高さ50cmほどに基段上にあり、基段周囲を安山岩で囲み、正面には足掛石を置いている。基段中央には、台座、蓮台、地藏像を配置している。刻字によると明和九年(1772)の建立で、一つの台座に3体ずつ納めうがって計六体が配置されている。石質は全て凝灰岩である。そして、基段中央正面に、径80

cmほどの円形につくり出した安山岩製の台石がうめこまれており、葬儀の際、棺台として利用されていたという。

一石一字塔（写真1）

北側に位置する一石一字塔は笠塔婆型で地下部分には方形の土壌が掘りこまれ、内部には小円礫が充填しており、各円礫には梵文一字は墨書されていた。この3号塔は宝暦3年（1753）の建立である。

南側に位置する一石一字塔は3号塔と全く同一型式で附風埋藏物も同時であった。67号と呼



写真1 一石一字塔（左3号、右67号）

ぶこの塔は、天明4年（1784）の建立である。二つの一石一字塔には、それぞれ願主が記されており、3号には「当院二世 宝珠院秀元法印」、67号は「慈覚院三世」と記されており、往時この墓地を供養した庵寺の僧侶によるものであろう。

石幢（写真2）

2号と呼ぶこの石塔は、葬送儀礼地の北東隅に位置し、周囲3m四方を列石で囲っている。石幢自体は浅い土壌中に根石となる大型角礫を配置した基礎施設の上に、安山岩製の自然石を台座として建立されている。本体は凝灰岩製で全て杓組により五つの部分から構成されている。石幢には墨書が施されていたが判読不能であった。発掘の結果、隣接する3号の土壌を規制しているところから、それより古い建立であろうと考えられる。

以上の他に供養塔として1号笠塔婆型石造物が道路改良工事の際に、2号（石幢）の脇に移転されていた。



写真2 石幢（2号）

5) 埋葬地

墓地全体の東半分は埋葬地となって、地上標識として石造の墓石が立ちならぶ。埋葬空間の中央部は現状では墓石のない空地が広がっていたが、これは葛城豊治家の墓道を10年ほど前に累代墓に合祀するため移転したもので、調査の結果、墓域を多数検出した。

まず墓石についてのべよう。墓石は基本的に次の8型式の分類できる。(第11図)

A型式 いわゆる板碑型である。断面四角形で背面は荒擗打のままで、頭部が尖頭状をなす。全て一枚の台石に納をうがって組合せる。

B型式 いわゆる位牌型の型式で頭部はかまぼこ状をなし、断面四角形で背面は荒削りのままである。明治期製作の2例を除いて全て台石に納をうがって組合せる。

C型式 冑型とよばれるもので、頭部の四隅をはねあがらせる笠塔婆の型態から変化した型式であろう。断面は正方形に近く背部は荒削りのままである。A・B型式と異なり刻字をする正面を掘りくぼめていない。この型式のほとんどは、台石を二枚以上使用しており、納をうがたず置き重ねをしている。

D型式 地藏浮彫型である。そのほとんどが舟型光背を背後にした半浮彫で、地藏尊あるいは女性立像が表現されている。蓮華座と一体になっており、全てが納をもって台石に固定されている。

E型式 無縫塔である。全て蓮台部を備え刻字部分を彫り込んでいる。

F型式 この墓地唯一の型態で、下駄をはいた男性像を表現し、台石に銘文を刻んでいる。

G型式 これは、A型式(板碑型)あるいはB型式(位牌型)の礎の台石を含めて、組合せ式の石殿に安置したもので、笠の正面に破風をもつものともたないものがあり、それぞれG1、G2とした。

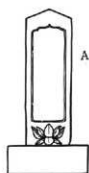
H型式 この墓地の中に2例のみあるもので、78号は内部にA型式の礎2基と地藏像を、79号は尖頭角柱型の礎を設置する石殿であるが、G型式と大きく異なるのは屋根の形ある。G型式は笠を一石でつくり出し、宝珠を頂上にのせるのに対し、本形式は板で石を組合せて切表形の屋根を表現している。

以上が墓石の基本的分類である。各型式はさらに細部の相異によって細分が可能であるが、まだ整理がおよんでいない。

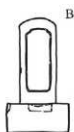
これらの墓石には、正面および側面に刻字あるいは墨書で銘文を記している。

A型式は正面に戒名と没年を記し、B・C型式は、正面に戒名、両側面に没年と月日を記しており、D型式は正面浮彫像の右側に戒名を左側に没年を刻んでいる。B型式は、正面に法名、両側面に没年と月日を刻むG型式は内部に組められた墓石の型式に従っているが、H型式を含めて2人の戒名を併記したものが数例ある。

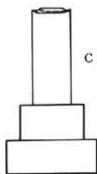
(参考文献) 渡辺文雄「墓地と墓標」『豊後国田楽荘』1983年、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館。山田拓伸「近世の墓地と墓碑」『豊後国田楽荘の調査』1、1986年、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館。



72号



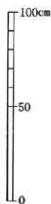
43号



4号



38号



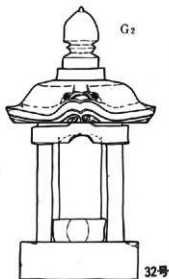
25号



6号



9号



32号



78号

第11図 墓石の分類

墓石配置（第12図）

前項で分類したA～H型式別に墓石の配置を描いたのが第12図である。なお、I型式として
いるのは大型円礫を基壇に一つ置いたもので、墓石建立に至らなかった死者の墓標である。

A型式は墓地空間の南辺と、葬送儀礼地の一部に密接に並べられ、正面を南東方向に向けて
おり、この墓地内において特異な配置を行っている。下部構造の調査の結果、この南辺に集中
する一群の墓石下には墓域がなく、女薮墓地が作られる18世紀前半ごろにまとめられて移転し
てきたようである。

B・C・D型式は群在し、特定の場所に集中する傾向はみいだせないが、C型式は後述する
ように時期的に新しいので、墓地の周縁部に配置される傾向がある。

E・F・G型式は葬送儀礼地に接した西側正面最前列に並ぶ傾向があり、銘文によると僧侶



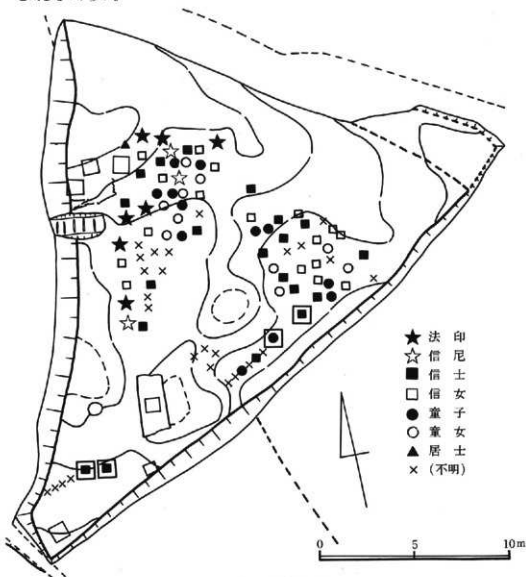
第12図 墓石の型式別分布

・僧尼の埋葬と一致している。またG型式の61号、62号およびH型式の78号下部には墓痕がなく、A型式の墓碑図同様に二次的な移転である。

銘文の分類とその分布（第13図）

銘文は先に記したように1墓碑1名を原則として、正面に戒名、右側面に没年、左側面に月・日を記入している。1墓石に2名の戒名を記す場合には、2名の戒名を並記して、その中央上に「同会」と刻む。また銘文は、刻字されたものと、墨書されたものに分かれるが墨書の多くは判読不能であった。

戒名の下に「霊位」「寿位」「之塔」と刻む例があるが、18世紀中ごろのものに集中する。また、「○○童子（童女）」という戒名をもつ幼児墓碑の場合、戒名の上に「早世」「早逝」と刻むものが多い。



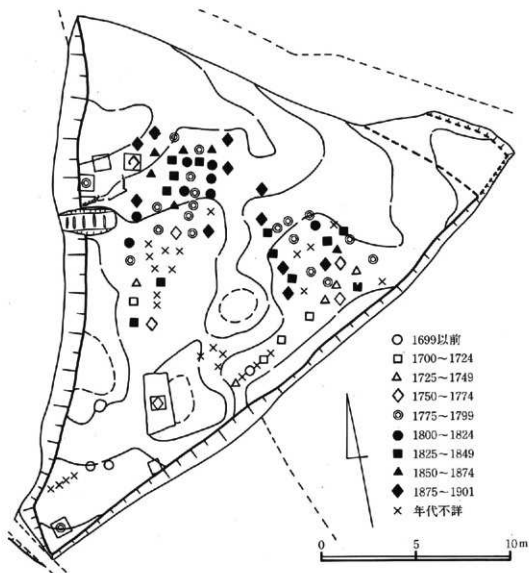
第13図 銘文別分布

戒名に付される脚字は、次の8種類に限られる。

「法印」「信尼」「信士」「信女」「童子(童男)」「童女」「居士」である。第13図はその分布を示したものである。

埋葬年代

ここで埋葬年代というのは銘文に記された没年のことである。死から埋葬までの間にはそれほど時間の経過はないと考えられるからである。61～66号、72～78号を除いて全ての墓石の下で墓塚を検出できたので、銘文の年代順で埋葬されたと考えられる。もちろん後述するように、墓石の建立年代は必ずしもこのとおりとはならないが、墓地の展開は銘文をもとに復元できる。この入会墓地の各家族割当地の内部で年代を径るに従って外側へあるいは墓と墓の間へと埋葬されていったことがわかる。またこの墓地が18世紀初頭から19世紀全体のほぼ二世紀間



第14図 墓石の年代別分布

にわたって営まれたことが明瞭である。17世紀代の墓石は全て、この墓地がつくられた前後に移転してきたものである。

墓 墳

地下の埋葬施設は、61～66号、72～77号を除く全ての墓石の下で検出した。

墓墳の型態は底面が水平な円形土壇で、大小2つの大きさに分かれ、一般に大型は掘りこみも深く、小型は浅い。棺は4例が、甕を利用し、蓋に安山岩の自然石を円形に整えた石を使っていた。その他の棺は全て木製の座棺と考えられるが、釘を使用したものは一例もなかった。また、79号墓はH型式の墓石をたてた墓で二名の戒名が刻まれた墓であるが、小型の陶器甕を利用し、中に火葬骨が充填しており、これも石蓋をしていた。

墓墳内には副葬品として、土師質小皿、陶器碗、磁器碗が1～2個体副葬される例が多く、棺外あるいは棺内に副葬されていた。またほとんど全ての棺内に銅銭が数枚程度ひとまとまりに検出された。6枚の例が多かったが、1～2枚の場合もあり一定していない。



写真3 墓地全景



写真4 33号墓



写真5 78号墓

6) 小 結

今回の調査で判明したことを述べておきたい。

墓碑型式の年代的变化、銘文のあるもののみを使って年代順に並べると、A型式（板碑型）は18世紀前半で終わり、18世紀にはB型式（位牌型）とD型式、さらにG型式が墓碑の主要型式になっていることがわかる。19世紀に入ると、B型式を大多数を占め、19世紀後半にはC型式が、B型式を上まわるようになる。A型式→B型式→C型式という変遷は、豊後高田市田染地区の近世墓地の変化とも一致する（註1）。また、18世紀後半から19世紀後半にB型式が盛んになり19世紀後半にC型式に移行するのは、畿内地方の変遷（註2）とも軌を一にしており、ほぼ全国的な傾向といえよう。

碑型の性格

碑型と銘文中の戒名の脚字の関係を調べてみると（表2）、碑型と特定の脚字に結びつきがあることがわかる。まずD型式（地藏浮彫型）は幼逝した幼児の埋葬に使われたものである。そしてE型式（無縁塔型）とF型式は男性僧侶用墓碑として使われている。B型式とC型式は成人男女の墓碑であるが、時代が下るに従って僧侶・幼児の墓としても使われるようになる。

ところで、女墓墓地から考えられる碑型使いわけの原理として3点があげられる。①、年令原理。早逝した幼児と成人による碑型の使いわけがみられる。D型式はその点に由来する。これに対して、性別による碑型の使い分けは、幼児・成人ともなく、僧尼の場合にのみみられる。②、聖俗原理。僧籍を有する人と一般成人の碑型の違いである。E・F型式はこの原理に基づく。ただし男性僧侶に限られ、女性僧侶はG型式をとる場合が多い。③、社会階層的原理。G・H型式は成人のみならず幼児の墓としても使われており、聖俗原理と年令原理とも区別されて、手厚く葬られている。一般成人の中

年代 碑型	～1700	1701～1750	1751～1800	1801～1850	1851～1901	計
A	1	2				3
B		1	10	16	7	34
C				2	9	11
D		3	6	2		10
E			2	1		3
F				1		1
G	2	3	5			10
H		2				2
計	3	11	23	23	16	76

表1 碑型別年代分布

において、B・C型式とG・H型式の使い分けの差は集落内における社会的地位の違いを表わしていると考えられる。

以上の原理をもとに年代ごとの変化を追ってみよう。18世紀後半は、3つの原理が相

脚字 碑型	法 印	僧 尼	僧 士	僧 女	童 子	童 女
A			1		1	
B		2	9	11	5	6
C	2		4	4		
D					7	4
E	3					
F	1					
G	1	1	3	5		1
H			1	2	1	
計	7	3	18	22	14	11

表2 碑型と戒名脚字の関係

	法印	信尼	信士	信女	童子	童女	計
B			4	4	1		9
D					4	2	6
E	2						2
G		1	1	2		1	5

表3 1751～1800年の碑型

	法印	信尼	信士	信女	童子	童女	計
B		2	3	5	4	2	16
C			2				2
D					2		2
E	1						1
F	1						1

表4 1801～1850年の碑型

	法印	信尼	信士	信女	童子	童女	計
B			2	1		4	7
C	2		3	4			9

表5 1851～1901年の碑型

互に規制しつつ、典型的あらわれる時期である(表3)。したがって碑型の上では、B型式(成人)、D型式(幼児)、E型式(僧侶)、G型式(有力者)が明確に使分けられる。19世紀前半になると男性僧侶(E型式)の墓碑を除いて成人も幼児もB型式に統一される(表4)。G型式も姿を消し、型態上の均等化がすすみ、聖俗原理の墓碑の使い分けのみ

がのこる。と同時に明治期以後に流行するC型式が、いち早く成人男性の墓碑として使用される。19世紀後半とりわけ明治期入るとC型式の墓碑一色になり、聖俗の区別もなくなる(表5)。こうして草創の上で、年令・聖俗・社会的地位を表示することがなくなったとき、火葬の普及とあいまって、家族毎に一基の墓をつくる累代墓の建設が可能になったと考えられる。

女蕨近世墓地の成立時期 ところで女蕨近世墓地はその成立の当初から儀礼空間と埋葬空間とを分けた計画的な墓地として整えられたらしい。表6をみると、79号の火葬墓は改葬に伴う処置とも考えられるので除外し、土葬を行なった最古の例をさがすと1723年建立の10号墓となり、以後一列を除いて全て埋葬が行なわれている。そしてそれ以前の没年銘文をもつ墓碑には埋葬例はなく、夫婦あるいは親子と推定される2人の墓を「同会」として一つの墓碑にまとめる例が多い。その最後の例は1712年である。したがって女蕨近世墓地は、1712年から1723年の間のある時点で女蕨集落の共同墓地として整備され、その以前の墓に手を入れて、ここに移したものと推定される。

墓石の石材 墓石の石材は一部の安山岩製を除いて硬質凝灰岩に限定される。安山岩の使用は台石に限られ、礎に利用される例はない。この石材は同じ肌張原地区内に産出地があり、近々20年ほど前まで墓石に利用されていたという。どのような形で近世の墓石が供給されていたか定かではないが聞きとりによれば半農半工の石工が注文に応じて切り出していたという。

(第6図)

註1 16頁参考文献に同じ。

註2 坪井良平『山城木津惣墓標の研究』『歴史考古学の研究』1984年。ビジネス教育出版。

表6. 銘 文 年 代 表

番号	没年月日	西暦	戒 名	碑型	備 考	墓 址
61	明暦 2. 9. 13	1651	宝山宗珍信士	G	同会	無
"	承応 2. 5. 29	1653	一澤妙伯信女 溪	"		"
74	○文 11.	1671?	○○○童男	A	同会	"
62	延宝 8. 8. 2	1680	古林了徳信女	G		"
"	貞享 3. 8. 2	1686	正徹怡覚信士	"		"
79	宝永 2. 11.	1705	飯一夢浄覚信士尊位	H	同会・火葬	有
"			○本智沙澄信女靈位	"		"
78	正徳 2. 10. 1	1712	飯一心元自清信女靈位	H	同会	無
"	" 2. 11. 9	"	飯元一空支如童子靈位	"		"
76	" 2. 11. 3	"	飯一天嶺常真信士靈位	A		"
10	享保 2. 9. 28	1723	梅大僧都三僧低光明院秀円法印	G	襲 棺	有
72	" 11.	1727	飯○	A	墨 書	無
80	" 17. 12. 29	1732	飯元心広性安信士靈位	G		有
9	" 19. 4. 9	1734	飯元本覚智心信女之塔	"		"
86	寛保 2. 10. 2	1742	早去孤漢童子	D		"
85	" 2. 10. 2	"	早世如幻童女	"		"
116	" 2. 12. 2	"	飯元心徹世空信女塔	B	墓石が移動	"
115	延享 2. 9. 12	1745	智教童女	D	"	"
24	宝暦 3. 7. 12	1753	孤山玄峻信士之塔	B		"
81	" 3. 11. 4	"	義香童子○	D		"
31	明和 8. 3. 21	1771	早世香厳童女	G		"
88	安永 3. 2. 2	1774	奇○○○	B		"
17	" 5. 1. 29	1776	禅庭恵寂信女靈	G		"
16	" 5. 2. 15	"	前大御進宝珠院秀元法印塔	E	襲 棺	"
114	" 5. 5. 24	"	早世玉孝童子	D		"
103	" 5. 6. 1	"	大導子悟信士	B		"
87	" 7. 4. 1	1778	松屋妙貞信女塔	"		"
121	" 7. 潤7. 11	"	○世禅教童子	D		"
40	" 9. 4. 6	1780	早逝知源童女	"		"
38	" 9. 5.	"	早世貞性童女	"		"
112	" 9. 7. 20	"	徳室宗寿信士塔	B		"
106	" 10. 1. 24	1781	寂堂慈空信士	G		"
89	天明 6. 2. 28	1786	分岳自明信女	B		"
92	" 6. 10. 25	"	賢室智養信女	"		"
41	寛政 1. 6. 6	1789	早逝智栄童子靈	D		"
105	" 3. 2. 14	1791	寂室慈照信女	B		"
36	" 5. 2. 12	1793	千溪智璣信尼	G		"
39	" 5. 8. 24	"	智雄童子	B		"
8	" 7. 2. 1	1795	桂堂寿香信女靈位	G		"
42	" 7. 3. 11	"	本原浄意信士	B		"

番号	没年月日	西暦	戒名	碑型	備考	墓址
25	寛政 11. 4. 28	1799	権大僧都三僧祇大寺院秀悦法印	E		有
102	享和 3. 2. 6	1803	英岳崇俊僧士	B		〃
47	文化 1. 2. 1	1804	花岳妙香信女	〃		〃
7	〃 2. 9. 24	1805	前大御通慈覚院秀負法院	E	襲 棺	〃
46	〃 4. 9. 12	1807	珠光童女	B		〃
45	〃 13. 8. 1	1816	早近義柱童子	〃		〃
37	〃 14. 12. 11	1817	早近梅窓智黒童子	〃		〃
6	文政 2. 7. 25	1819	三井門流権大僧都智宝院大栄法印	F		〃
35	〃 7. 3. 1	1824	慈明童子	B	俗名 弁吉	〃
27	〃 8. 5. 16	1825	実岩常負僧士	〃	〃 万吉	〃
11	〃 8. 9. 5	〃	歸寂禅林智定信尼位	〃	行年 69歳	〃
21	〃 9. 6. 14	1826	本心自得僧士	C	俗名 定治	〃
43	〃 10. 潤6. 19	1827	智現童女	B		〃
95	〃 10. 11. 30	〃	歸元安相慧心僧女	〃		〃
97	天保 4. 1.	1833	春嶺義雲僧士	〃		〃
28	〃 9. 5. 20	1838	定山忠戒信女	〃	俗名 シカ	〃
96	〃 10. 3. 4	1839	歸元無相妙念信女	〃		〃
104	〃 11. 9. 17	1840	歸元月意浄円僧士	C	肋右エ門	〃
109	〃 13. 9. 17	1842	慈観童子	D		〃
82	〇保 13. 12. 29	〃 ?	帰元梅林妙香信女	B	行年 29歳 シヲ	〃
113	弘化 3. 4. 23	1846	〇拾童子	D	墓石移動	〃
29	嘉永 2. 潤4. 15	1849	智録童子	B	丑太良	〃
34	〃 3. 1. 10	1850	椿嶺妙寿信尼	〃	キ ヨ	〃
90	安政 4. 6. 28	1857	忠寂童女	〃		〃
14	〃 6. 2. 4	1859	南関妙意信女	〃		〃
15	〃 6. 9. 17	〃	竺応祖首僧士	〃	武 十	〃
30	文久 2. 2. 18	1862	花室貞鮮童女	〃		〃
44	明治 7. 2. 17	1874	梅堂智芳信女	C		〃
49	〃 8. 旧5. 1	1875	金山了暉僧士	B		〃
101	〃 8. 旧8. 18	〃	智秋禅童女	〃	松田甚造 娘	〃
13	〃 9. 旧11. 4	1876	権大僧都宝珠院秀等法印	C		〃
50	〃 9. 11. 16	〃	権大僧都宝珠院秀盛法印	〃		〃
94	〃 10. 旧7. 7	1877	辻恵禅童女	B	松田甚造 娘	〃
51	〃 14. 1. 13	1881	安必素娘信女	C		〃
91	〃 17. 旧1. 7	1884	禅林智悦信女	〃	葛城善作 妹	〃
110	〃 19. 旧10. 10	1886	素道妙心信女	〃	〃 母	〃
111	〃 21. 8. 8	1888	太岩宗古僧士	〃	〃 父	〃
4	〃 31. 旧6. 7	1898	宝珠院高見了海居士	〃	行年45歳、高見久馬	〃
55	〃 34. 旧4. 26	1901	林九岳慈音僧士	〃	葛城万吉	〃

IV ま と め

昭和61年度、九州横断自動車道（湯布院一大分間）建設に伴う発掘調査は、大分地区の机張原遺跡と湯布院地区の若杉遺跡で実施した。

机張原遺跡は、女薺近世墓地の調査を行ない、墓地の変遷、性格等ある程度把握することができた。墓地は、明暦年銘（1650年代）の墓碑を最古として、正徳、享保年間に明治中頃に至るものであるが、墓地と共に葬祭場施設としての棺台、その正面に六地蔵、両端に一字一石塔を配しており、近世後期の墓地の性格を良好に伝えている。

県内における近世墓の調査例は、中津市ガラスノ遺跡や黒水遺跡が知られる程度である。しかも両遺跡は、骸骨器を埋納したものであり、女薺墓地とは地域だけでなく、被葬者や宗教的な違いがあるものと思われる。

若杉遺跡は、火山岩が露頭した小丘陵の頂部に位置する特殊な遺跡である。しかし土器の量からすれば、ごく限られた時期のものである。また、遺跡の性格については、土器に高坏が見られない事も含めて、一時的な生活跡と考えられる。

以上、今年度調査した両遺跡は、いずれも県内では調査例のないものであり、近世墓や弥生時代終末の特殊遺跡の在り方について、その一端を明らかにしたものとして注目されよう。

1986年度九州横断自動車道建設に伴う発調査概報
(湯布院一大分間)

若 杉 遺 跡
机張原女菰近世墓地

1987・3・31

発 行 大 分 県 教 育 委 員 会
印 刷 日 の 丸 印 刷 株 式 会 社

